

## はじめに

この国はいま、どんな状態にあるのだろうか。まず思い浮かぶのは、労働の不安定化による生活の安全の破壊、格差問題という名で偽装された貧困化、ポスト工業化社会に不適合となった社会保障制度の持続不可能性など、「社会問題」が噴出していることだ。

この現状をさらに深刻にしているのは、近年、そうした「社会問題」が隠しがたいものとなつていながらもかわらず、政治が長期的な視野に立った抜本的な解決策を実施することはおろか、構想さえできていないことだ。コロナ禍は改めてこのことを確信させてくれた。

思い起こせば、第二次安倍政権はこうした日本の象徴であった。この政権は、近年の他の政権と比較して「社会問題」に効果的に対処し、長く停滞した時代を終わらせる上でいくつもの好条件を備えていた。憲政史上最長の政権だったという点、衆参のねじれもなく安定した政権運営が可能であったという点、そして首相のトップダウン型政策決定ができるよう内閣機能の強化がなされていたという点だ。これほどの好条件を揃えた政権はまず記憶にない。

しかし、実情は「社会問題」を解決するには程遠く、コロナ禍の最中に自ら退陣する道を選

択した。そればかりか、好条件が裏目となって、第二次安倍政権の下で政治権力の私物化という事態が進行した。こうして、この国の政治は私たちの生活を脅かすリスクになりつつあるように見える。

そんな政治をこのまま見て見ぬふりして放置し続けるのか、少しずつでも地道な改革をしていくのか、それとも、こんな政治のやり方はきっぱり止め<sup>や</sup>にして、全く違うものに取り換えてしまうのか。私たちの未来は、私たちがそれらのどれを選択するかにかかってくる。しかし、いずれを選択するにしても、この国の政治がどのような原理や制度に基づいて行われてきたのかを、まず確認しておく必要があるだろう。

日本の政治は、民主主義、より正確には、選挙と政党を基盤にした代表制度の下での民主主義によって運営されている。一般にこれを代表制民主主義と呼ぶ。代表制民主主義について、統治の基本原則を記した現行の日本国憲法ではこう規定されている。

「そもそも国政は、国民の厳粛な信託によるものであつて、その権威は国民に由来し、その権力は国民の代表者がこれを行使し、その福利は国民がこれを享受する」と。

厳かでありながらも、一見、平易な一文だ。しかし、日本国憲法に結実した代表制民主主義の定義の真意は、字面をなぞるだけでは、把握することはできない。民主主義と代表制度は、

元来どのような関係にあったのか、いかなる経緯でそれらは結合し、代表制民主主義が誕生したのか、代表制民主主義がよく機能する条件とは何か、そうした条件が喪失され、代表制度が機能不全となった場合、民主主義はどうなるのか。これらの問いに正面から向き合ったとき、代表制民主主義に対する確かな理解を得ることができる。その上で、この国の政治に対して私たちがどのような選択をすべきなのかについて、より良い判断ができるようになるだろう。

本書では、代表制民主主義とは何かを説明すると同時に、現在、それが小手先の手当てではどうにもならないほどの機能不全に陥っていることを明らかにする。さらに、現代に適した形で代表制民主主義を復活させる抜本的な改革の方向性も提示する。そのために、代表制民主主義の仕組みを解体し、さらに再構築していく。

具体的にはまず、日本を含めた民主主義諸国の苦境の原因を究明する。そこから、民主主義の本来の理念や目的は何であったのか、近代に復活する代表制度の下での民主主義とはいかなるものであったのかについて検討する。このために、民主主義の理念を明確にした上で、民主主義とはそもそも無縁であった代表制度が近代以降、その理念を実現する手段として導入された経緯を明らかにする。さらに、代表制度が民主主義の制度として機能するための条件を検討し、その条件が消失してしまつたがゆえに、代表制度が民主主義の制度として機能しなくなつ

ていること、そしてここに現代の民主主義諸国の行き詰まりの根本的な原因があることを指摘する。最後に、現代において民主主義の理念に奉仕するような代表制度の改革案を考察する。こうした大筋は、以下の章立てで詳述される。

第一章では、民主主義諸国の現状から出発する。日本に限らず、現代の民主主義諸国はもはや破綻寸前だ。《私物化》をキーワードとすることでこの苦境を解明する。現代の私物化は、二つの領域で進行している。それが、社会の私物化と政治の私物化だ。

この章では、社会の私物化にフォーカスする。他人の意思の下に置かれることなく自由な状態で生きていくために共有せざるをえないもの——例えば、空気や水などの自然、道路や公園などの社会インフラ、医療や教育をはじめとする公的制度——が新自由主義によって私物化されている。新自由主義による、社会という共有のものものの私物化。これが民主主義諸国の苦境の一因に他ならない。

第二章では、政治の私物化が主題となる。政治の私物化とは何か。それは、本来なら社会の私物化を防ぎ、支配と服従の関係を排除するために存在している、共有のものとしての政治（権力）の私物化を意味する。この事態が現代の民主主義諸国で起きている。政治の私物化の行き着く先は、専制政治である。とするなら、現代の民主主義諸国は専制の脅威に晒さらされていることになる。

この章の議論はそれだけではない。専制の脅威の中で民主主義はいま、全体主義との壮絶な戦いを演じた一九四五年以来の最大の危機を迎えつつある。その危機とは、台頭する超大国中国の統治モデルと民主主義との競争から生ずる。このモデルは、政治的メリトクラシー——本書では、選挙ではなく、能力と経験本位の選抜を勝ち抜いた政治エリートによる支配を意味する——によって、自由を制約しながらも治安と豊かさを人びとに提供しようとする。民主主義が統治をめぐる中国とのこの競争に勝利できる保証はどこにもない。むしろ、今後多くの民主主義国に暮らす人びとが中国モデルに誘惑され、公然と支持を表明する可能性さえある。第二章では、その理由についても分析する。

第三章では、民主主義は元来、何を目指していたのか、いかなる目的で生まれたのかを問う。つまり、民主主義の理念とはどのようなものかをはっきりさせる。民主主義を多数決や選挙と同一視する人はいまだに多い。それでは、民主主義について十分に理解しているとはいえない。確かに、現在、代表制民主主義を運用していく際、代表者を選ぶために選挙が行われ、何らかの意思決定を策定すべく多数決が行われる。しかし、だからといって、選挙や多数決が民主主義それ自体であるということにはならない。それらは民主主義が目指す理念を実現するための手段でしかない。その手段は選挙や多数決以外にも存在する。だから、手段と目的の区別を明確にするためにも、民主主義とは何かについてまず問わねばならない。そこで、古代の民主

義および近代の民主主義の双方を、歴史的あるいは理論的な視座から考察する。そこから得られる民主主義の理念こそ、反専制としての民主主義なのである。

第四章では、代表制民主主義とは元来、どのようなものであったのかについて議論する。そのために、代表制度の起源と歴史について理論的視座から検討する。出発点は、代表制度が、民主主義とそもそも無関係な制度であったという事実だ。現在の一般的な民主主義に対する理解からすれば、これは驚愕すべきものに違いない。実のところ、一八世紀に復活する民主主義は、反専制という古からの理念を大規模化した国民国家において実現するために代表制度と接合させられた。ここに代表制民主主義が誕生するわけであるが、本書では一級の政治思想のテキストを参照することでその始まりを確認する。その後の発展において、代表制民主主義は、工業化社会の完成とともに黄金期を迎えることになる。二〇世紀中頃における黄金期の社会的・経済的・文化的条件が何であったのか、その条件の下で、代表制度がどのように機能したのかを論じる。

第五章では、代表制度の機能不全がどのようなものであるのか、その原因がどこにあるのかを明らかにする。一九七〇年代以降、多くの民主主義国はポスト工業化の時代に突入していくが、その過程で代表制民主主義の黄金期を可能にした諸条件が徐々に消失していく。それに伴い、代表制度が民主主義の制度として想定された機能を果たすことができなくなっていく。代

表制度の機能不全の結果が民主主義のポピュリズム化である。そこで、グローバルに進行している現代民主主義のポピュリズム化に焦点を当て、その原因を代表制度の機能不全から考察する。トランプ前大統領に代表されるポピュリストの下で、元来は専制政治に対抗するための砦とりでであった民主主義は私物化され、支配のための道具となり果てつつあることを論じる。

第六章では、最後に残された課題、「それではどうしたらよいのか」について検討する。まず確認すべき前提は、現行の代表制度を批判的に検討したからといって、「毎日国民投票」をすればよいというような直接民主主義を称揚することにはならないということだ。途方もない努力の末に作り上げられた代表制度という遺産を放棄することは賢明でも、また可能でもない。それに、熟議の機会を欠いた現行の国民投票のやり方には、多くのエリートたちが危惧するリスク——衆愚政治のリスク——がないともいえない。これが本書の基本的な立場だ。そこから、代表制度を現代の条件に合わせてどう改革していくのかを検討する。具体的には、熟議と参加をベースにした民主主義のイノベーションの実例に焦点を当てる。

何とありきたりなことをと思われるかもしれない。しかし、そうするのは、「話し合いをしましょう」とか、「選挙だけでなくデモにも行きましょう」などとお説教を垂れるためではない。その実例には、政治権力を民主的にコントロールするための、新たなアイデアと工夫が存在するからだ。さらに、新しい時代の代表制民主主義を支える市民を創出する可能性があるか

らであり、新自由主義によって荒廃させられた共有のものを新たに想像し創造する可能性があるからに他ならない。

現代の多くの民主主義国で見られる政治の破綻と、それに乗じて民主主義のオルタナティブとしての存在感を強めつつある中国の統治モデル。現代の民主主義が直面するこの危機を少しでも危惧するのなら、代表制度の過去を振り返り、現在を診断し、未来を構想することはもはや義務と云っていい。とはいえ、それは決して暗くて空しい義務ではないだろう。これまで、私たちの生活を支えるさまざまな制度の多くが、試行錯誤を経ながらも時代の変化に適応し、より望ましい形に進化してきた。代表制度もその例に漏れることはないはずだからだ。そして、何より、代表制度の新たな進化を構想することは、閉塞感よりも開放感が、絶望よりも希望が伴うはずだからだ。